

特集：進化する空港アクセスと地域との共生

〔空港輸送を担い、地域の暮らしを支える京成電鉄〕

公民「協働」で、

持続可能な

まちづくりを目指す

東京都葛飾区では、生活利便性の高さや交通アクセスの良さ、子育て施策の充実などから、世論調査でも区民の84・5%が「これからも住み続けたい」（葛飾区世論調査・2018年12月）と答えている。現在、京成電鉄押上線では、四ツ木駅―青砥駅間の連続立体交差事業が施行中であり、それに伴う京成立石駅周辺の再開発事業が進められている。公民連携でつくり上げる安全で快適なまち、そして魅力的なまちづくりについて、青木克徳葛飾区長にお話を伺った。

文●茶木 環／撮影●織本知之



葛飾区長
青木克徳
Katsunori AOKI

公共交通は安全・安心なまちづくりの根幹

――まず葛飾区の概要をお話しいただけますでしょうか。

青木 葛飾区は地勢的にいうと、川に囲まれた平らな低地です。その良さもあるし、一方で水害の危険もあります。人口は約46万人で、毎年微増しております。これはとてもいいことだと思っています。人口構成で言いますと、65歳以上の高齢者が24・5%、子どもの数が少しずつ減ってきて、現在は下げ止まった状態です。これからは多くの働き盛りの方、子育て世代の方に住んでいただきたいと思い、待機児童の解消など、子どもを育てやすい環境づくりを地域全体で進めていこうと取り組んでいます。外部の評価としては、全

国162の自治体を対象に調査する日経DUAL×日本経済新聞の自治体調査「共働き子育てしやすい街2019」で、全国1位になるなど高い評価をいただいています。

――「住み続けたいまち」として住民の満足度が高いのだと思いますが、住民とまちの関係性についてどのようにお考えですか。

青木 葛飾の人たちは下町気質といいますが、非常に人柄がよく、純朴な感じで、「みんなが力を合わせていいまちをつくらう」という気概があります。私は「協働」という言葉をずっと使っていますが、防災やまちづくり、子育てや高齢者福祉など、みんなで力を合わせるのが最も重要だと考えています。協働により、自身がまちづくりにへの参画意識を持つことがとても

大事で、行政はそれを進めるための条件をしっかり整え、区民とともに、いまち、暮らしやすいまちをつくらうと努力しています。葛飾区の基本計画にもそうした考え方を盛り込んでいます。今では多くの方に「協働」という言葉を使っていただけのようになりました。

――公共交通も地域の活性化や暮らしやすいまちづくりの根幹となるものですが、その整備はいかがですか。

青木 公共交通は安全で快適な暮らしには欠かせない非常に重要なものですが、京成グループでは京成バスと京成タウンバスがありますが、葛飾区では民間のバス会社や都営バスと一緒に路線バスの整備を積極的に進めてきました。社会実験を行って、区も広報紙などで大々的に宣伝して区民に利用してもら

い、多くの人が利用できるようでしたら継続するという試みを通じて、この10年で9路線を新設しました。

鉄道に関しては東京都が連続立体交差事業を進めており、葛飾区も積極的に協力させていただいている中で、京成電鉄の押上線は四ツ木から、京成立石、青砥までの区間が、あと数年で完成予定です。次の京成高砂もいよいよ事業採択に向けた準備の調査等が始まっています。また今後、お花茶屋や堀切菖蒲園などもありますので、こちらもぜひ京成電鉄にご協力いただけたらと思っています。

併せて駅前の再開発や都市計画道路整備などについては、区も積極的に関わっていきます。立石では3カ所での再開発の計画がありますが、京成立石駅の周辺は密集市街地で、これを解消し

特集：進化する空港アクセスと地域との共生

[空港輸送を担い、地域の暮らしを支える京成電鉄]



四ツ木駅—青砥駅間の連続立体交差事業が進んでいる



「重要文化的景観」に選定された葛飾柴又。柴又駅前には「フーテンの寅像」と「見送るさくら像」がある。

ないと安全なまちにはなりません。また駅前には電車やバス、タクシーなどの交通結節点であり、ポテンシャルも高いことから、土地の高度利用を進めて都市機能を集約させ、駅を拠点として安全安心で、利便性の高いまちづくりを進めていきたいと考えています。

一方、立石のまちは商店や飲食店が密集していることを魅力に感じている人も多くいますので、そうしたことも踏まえて全体のまちづくりを進めていきたいと考え、地元の皆さんと話し合いを続けていくところですよ。

区内ゆかりのコンテンツで魅力を発信

——観光に向けた魅力づくりはどのように行われていますか。

青木 葛飾は、もともと「ものづくりのまち」です。工場数は減少傾向にあるものの、現在でも2131と23区

で3番目に多く、高い技術も持っていますので、先日も「町工場見本市」という独自の見本市を開催し、町工場を残す努力をしています。

また、世界的にも人気の高い漫画「キャプテン翼」の原作者である高橋陽一先生は、四つ木のご出身で東京都立南葛飾高等学校の卒業生です。作品にも葛飾の要素がたくさん入っていますのでそうしたものを活かしていきたいと考えています。京成電鉄にも四ツ木駅の「キャプテン翼」特別装飾など協力的に取り組んでいただいています。

柴又も映画「男はつらいよ」の「寅さんのまち」としてよく知られていますが、古くから地域の方々が大切に守り育ててきたまち並みや生業により、懐かしい雰囲気を感じられる良さなどがあり、2018年に国の「重要文化的景観」に選定されました。関東では群馬県渡良瀬に次いで2カ所目です。

いいものを知りたくて残して、なおかつ発展させて、まちの魅力を発信することが大事だと考えています。

ほかにも亀有を舞台にした漫画「こちら葛飾区亀有公園前派出所」は有名ですし、新小岩には「モンチッチ」の生みの親であるセキグチ本社があり、「モンチッチ」のキャラクターがまちづくりに活用されています。立石に本社があるタカラトミーは「リカちゃん」や「プラレール」、それに「人生ゲーム」など皆さんご存じのものも多いと思います。商店街の店を人生ゲームのマスに見立てて楽しむイベント「まちあそび人生ゲームIN葛飾」を青砥駅周辺で開催していますが、昨年は約1万人の参加がありました。

夏の花火大会も、いろいろな趣向を凝らすようになり、10年前は30万人台でしたが、今では約70万人が集まるようになりました。まだまだいろいろなものを生み出せると思いますし、少しずついろんなことを仕掛けながら、区内の魅力・歴史・文化を発信して盛り上げていくことで、皆さんに足を運んでいただきたいと思っています。

——地域で掘り起こされた宝は住民にとっても誇りになりますか。

青木 おっしゃる通りだと思います。京成電鉄には本場に積極的に協力していただいて、四ツ木駅もそうですが、「キャプテン翼」をスカイライナーにラッピングしていただく話もしています。話がスピーディーに進み、前向き

にいろんなことをやっていただいています。

区内のイベントや事業が活性化すると、鉄道も結果として活気づくものと考えています。実際、こうしたイベント時には京成電鉄の利用者が増えていると伺っています。私が考える「協働」には、区民のほかに、京成電鉄のような区と関連の深い企業や事業者も入っています。これからもさまざまな対話を重ねながら連携していきたいと思っています。

——地域の発展のためには各企業の存在が重要ということですね。

青木 最近では「社会貢献」や「SDGs（持続可能な開発目標）」という言葉がよく使われます。環境問題で地球を持続可能なものにするためにも企業が貢献する。同じように、企業が地域のために社会貢献していくことが、結果として企業の発展につながる。もちろんそうした認識は以前よりお持ちだと思いますが、最近はその明確に打ち出していただけになってきたと思います。洪沢栄一の時代から『論語と算盤』、つまり「商売と倫理は一緒だ」と言われています。目先の結果や利益を追いかけけるのではなく、2年先でも3年先でも結果として実際に数値が上がってくるようなことを、企業や住民と行政がお互いに協議しながら連携して進めていく。そうすればいろいろなことができると思います。

※群馬県渡良瀬の利根川・渡良瀬川合流域の水場景観